

# Cutting-Edge

[カティング・エッジ]

**Move** この人にきく

## ウェブ世界のジェンダー

情報テクノロジーが来るべき世界の構造を変えるであろうことは、すでに多くの識者が指摘してきた。特に1990年代後半からは、WWW (World Wide Web) が公開され、不特定多数の人々のアクセスが可能になり、インターネットは、爆発的に普及した。

ダナ・ハラウェイの指摘したように、情報テクノロジーが21世紀の社会システムにおけるジェンダーの有り様を変えていく状況に、私は大きな関心をもっている。Googleの検索機能についても、比較的早いうちから注目していた。ある時、女性センターについて検索をしたとき、今まで見たことの無いサイトが画面の右側にあった。Googleが、2002年に検索キーワードと広告を連動させた「アドワーズ広告」である。その内容は、女性センター、男女共同参画センター等を批判するものであった。Yahoo!は娛樂情報や商品情報が多く、広告と連動していたが、Googleは、知識的、思想的情報を提供している傾向にあり、それまで広告と連動してはいなかった。

それ以前のGoogleの検索順位は、良質のWebのページからリンクされるページは良質であるという判断をもとに、そのページのバックリンク(被リンク)数の多さを評価の基準にし、検索順位を算出していると言われている。だが、アドワーズ広告の開始により、検索画面の左側にサイトを順番に並べる以外に、右側の位置にアドワーズ広告を掲載し、クリックされた場合に広告主が広告料をGoogleに支払うシステムを開発した。今やこの収益がGoogleの大部分を占めている。しかも、アドワーズ広告の位置にあって、平均クリック率が高い場合は、左側の検索順位一覧の上方に移る。このように検索の際に、順位の高いもの、上部に位置するものをクリックするような誘導がなされている。

2004年頃からは、「ジェンダー」「ジェンダーフリー」のサイトの表示上で、男女共同参画やジェンダーフリーを危険視するアドワーズ広告が見られるようになる。特に、2005年12月の男女共同参画基本計画第2次改定に至るまでの時期は、いわゆるジェンダー・バッシング派が上位に入っていた。このようなサイトの順位の変化は、バックリンクによる順位付けを意識した、実世界の政治的な作戦が反映していることが明らかだ。

「ジェンダー研究」を学び始めた学生が、このような検索サイトをみて、不安感や不審感を抱いたことも少なくないが、ジェンダー研究にあまり関心のない人々への影響力ははかり知れない。諸外国の「ジェンダー」に関わるキーワード検索によるサイトの順位やその内容はそれぞれ異なるが、日本の「ジェンダー」をめぐる検索サイト上の異常さは、あまりに際だっている。このような状況の中で、ウェブ世界でのジェンダーに関わる的確な「知」の発信は疎かにできない。さらに、情報テクノロジーのシステムについての解明も、21世紀のジェンダー研究の大きな課題である。



## CONTENTS

Move この人にきく	1P
Books ジェンダー最・前・線	2, 3P
Information	4P



お茶の水女子大学ジェンダー研究センター教授  
館 かおる  
(たち かおる)

## 未来・ことは

人は女に生まれるのではない、  
女になるのだ。

シモーヌ・ド・ボーヴォワール

(フランスの哲学者)  
『第二の性』(井上たか子・木村信子監訳、新潮社、1997年)より

## 京都橘大学女性歴史文化研究所叢書 女の怪異学

京都橘大学女性歴史文化研究所における学部横断的な研究活動の一環として、『〈悪女〉の文化誌』(2005)に引き続き第2弾として上梓された本書は、「怪異」のテーマのもと、扱う時代や国(日本、中国、アメリカ)、作品の領域(古典、落語、現代小説、漫画)も多岐にわたり、また怪異現象についても幽霊のみならず人造人間まで扱うというように、実に多彩な内容になっている。

収録論文は以下の通り。物の怪として登場する六条御息所を中心、女の内なる「女」と「母」の葛藤を論じる鈴木論文(「源氏物語」)。女の幽霊化を促す出産と家にまつわる問題に焦点を当てる林論文(坂東真砂子の『狗神』と京極夏彦の『姑獲鳥の夏』)。貞節な女を扱う「列女伝」とは対照的な怪異譚の歴史を探るべく、六朝志怪の幽霊譚から明清時代の艶情小説への流れを追う蒲論文。落語家三遊亭円朝の『怪談牡丹灯籠』を中心に音響効果と幽霊の「ことば」を解明する安達論文。SF漫画の源流、欄郁二郎の人造美女少女たちの世界を「脳波操縦士」と「植物人間」に探り、そこに「孤独な」欄自身の心象風景を重ねる細川論文。甘えを絶ち恐怖の念を抱かせることで耳男に「眞実なる姿」を実現させようとする夜長姫

の姿に「理想的な首長」を見る野村論文(坂口安吾の『夜長姫と耳男』)。「靈女」を初めとする超常現象を描く円地文子が『女坂』の後『女面』を書かざるを得なかった理由を、抑圧された女たちの怨嗟の解放に見る辻本論文。「濃すぎる」母性愛の是非を問い合わせ、それゆえに殺された子の幽霊の意義を追及する鎌田論文(トニー・モリソンの『ピラヴィド』)。いずれも既成概念を突き崩す、刺激的な論文揃い。



### 女の怪異学

女が幽霊を初めとする怪異現象の扱い手となるのは、言うまでもなく性に関する男女の「非対称性」というジェンダーの問題が潜んでいるからである。論者たちは、その怪異現象の根底に潜む「反価値性」「否定性」に着目し、それらがジェンダーの問題だけでなく、制度や文化など様々な次元の問題をも複合的に告発している点を明らかにしている。このような広がりを内包するために選ばれた「女の怪異学」という「学」をつけたタイトルに、この領域の「可能性」に期待する論者たちの自負が込められている。

たべい よしこ  
田部井 世志子(北九州市立大学文学部教授)

- 鈴木紀子、林 久美子、  
野村幸一郎 編著
- 晃洋書房
- 2007年初版
- 2,100円(税別)



## 1945年のクリスマス—日本国憲法に「男女平等」を書いた女性の自伝

本書は、サブタイトルにあるように、日本国憲法第24条(婚姻及び家族関係における個人の尊厳と両性の平等)を書いた女性の自伝である。戦後GHQは日本政府に帝国憲法の改正を示唆し、日本政府は起草作業を始めるが、途中の草案を新聞にスクープされる。予想以上に保守的な内容に驚いたGHQは、急遽自ら草案を作成し、日本側作成の草案として受け入れさせた。著者は、そのGHQ草案の執筆陣の一人である。

本書には、著者の生い立ちやGHQスタッフとして来日するまでのいきさつ、憲法執筆時の様子などが描かれている。憲法第24条は日本の女性の地位を一変させた画期的な条文であるが、著者の人生は、この条文を生み出すために神がシナリオを書いたドラマのようである。歴史にタブーの「もしあの出来事がなかったら」の連続で、両親の結婚から条文の確定にいたるまで、一つ一つの出来事のどれが欠けても24条はなかったであろう。

著者がGHQスタッフとして来日したのは1945年の12月24日、クリスマス・イブ。24条は日本の女性にとってのクリスマス・プレ

ゼントであったといえよう。

今年は憲法施行60周年。戦後の女性の地位向上の出発点であった憲法の男女平等規定の誕生秘話を読んでみるのはいかがであろうか。

### 日本国憲法第24条

「①婚姻は、両性の合意のみに基いて成立し、夫婦が同等の権利を有することを基本として、相互の協力により、維持されなければならない。②配偶者の選択、財産権、相続、住居の選定、離婚並びに婚姻及び家族に関するその他の事項に関しては、法律は個人の尊厳と両性の本質的平等に立脚して、制定されなければならない」という条文。この条文を根拠に、妻の無能力、婚姻の同意や居所の指定といった戸主権、家督相続などを定めた民法(家族法)が改正され、家制度は廃止された。また、妻のみが罰せられていた刑法の姦通罪も廃止された。

かんざき さとこ  
神崎智子(北九州市教育委員会人権教育担当参事)



- ペア・シロタ・ゴードン 著
- 平岡磨紀子 構成・文
- 柏書房
- 1995年初版
- 1,748円(税別)



## 双書ジェンダー分析 「少女」の社会史

「近代」は童心主義と教育主義を基盤に「子ども」という概念をつくり出した。しかし、「少女」は「少年」とともに「子ども」に含まれつつも異なる存在であったことが、「少女」という曖昧な概念の形成と受容のプロセスを分析することで明らかにされる。まず、少女雑誌が表象する「少女」の理想像と「少年」のそれとの比較分析によって、人生における「成功」に違いがあることが指摘される。「少年」の「成功」は進学や実業によって経済力や地位を得ることであるのに対し、「少女」の「成功」は芸術で身を立てることであった。また、少年には理想を達成する道が開かれているのに対し、少女には「努力すれば何とかなるかも知れない」という期待を抱かせつても、実際にはほぼ実現不可能であった。なぜなら社会が少女たちに期待していた第一の役割は良妻賢母だったからである。このように、理想と現実との間に乖離がある点こそがすなわち「少女」の曖昧さの所以であり、ジェンダーを構成した「近代」の教育主義の一侧面であると著者は指摘する。さらに、

少女雑誌の投稿欄を通じて形成された「少女ネットワーク」の分析を通して、少女たちは「エス」という親密な関係性のなかで家父長的社會に抵抗しつつも、一方では少女雑誌が提示する「少女」役割モデルを受容し、ジェンダー・アイデンティティを形成していくことが明らかにされる。

### エス

「エス」とは「sister(姉・妹)」の頭文字の「S」を取った「女学生隠し語」のひとつで、女学生ないし少女同士の親密な関係をあらわす。相手との愛情を核に、相手を唯一無二の存在とみなし全てを受容し、関係の永続を望むことを特徴とする。「エス」は、「少女」の親きょうだいへの反抗、男性嫌悪、結婚の拒否などを内包し、家父長的文化への対抗文化として機能する。しかし、良妻賢母となることを当然視する異性愛主義社会では、少女同士の親密さはやがて消え去るものとみなされ、バッシングの対象にはならなかった。

とき やわ  
十時 康(北九州市立大学・香蘭女子短期大学非常勤講師)



- 今田 絵里香 著
- 勤草書房
- 2007年初版
- 3,300円(税別)





■ 村松泰子 編  
■ 河野銀子、中澤智恵、  
池上徹、藤原千賀、  
高橋道子 著  
■ 日本評論社  
■ 2004年初版  
■ 2,200円(税別)



## 理科離れしているのは誰か—全国中学生調査のジェンダー分析

本書は、理科の好き嫌い、その理由、理科を学ぶ意味についての認識、理科に対する態度、それに影響している要因を探るため、中学生を対象に、1年生の段階と1年後の2年生の段階で行った質問票調査の結果を、ジェンダーの視点から分析、考察したものである。なぜ、「理科離れ」をジェンダーの視点で分析する必要があるのか。それは、科学技術分野での男女共同参画推進が必要不可欠であるにもかかわらず、現在、男子6割女子4割という大学入学者比率の差が、科学技術分野ではさらに拡大することが背景にある。

著者らは、この原因として高校における文系理系の進路選択以前の理科に対する好き・嫌いあるいは得意・不得意の意識が関わっていると考え、そこになぜ男女差が生じてしまうのかを考察しようとしている。理科の実験授業で、積極的になる男子に対し、何となく補助的な立場を取ってしまう女子という傾向。科学に対する自発的な関心の持ち方や学校の成績には男女差が認められず、もっぱら日常の生活体

験に男女差があることなどをこの調査は明らかにしている。もし、このような現状が結果的に女子生徒を理科離れさせているとすれば、周囲の人たちの責任は重い。

### 科学(的)リテラシー (science literacy)

本書では、「個人的な意思決定や社会的な活動のために必要な科学的な概念およびプロセスについての知識および理解」とあり、具体的には「日常の経験について好奇心から導かれる探求をし、答えを見つけるか、意思決定ができる」と、「自然現象について記述し、説明し、かつ予測能力をもつて」ということを意味すると述べられている。「科学技術と社会に関する世論調査」(内閣府)によると、男性より女性に科学技術についてのニュースや話題への関心がない人が多く、職業別では主婦に関心がない人が多い。大人も含めた科学リテラシーの向上こそが、女子の理科離れを解消する有効な策である。

みうら ゆきこ  
三浦 有紀子(文部科学省科学技術政策研究所上席研究官)



■ ブレンダ・マックス 著  
■ 福岡伸一 監訳  
■ 鹿田昌美 訳  
■ 2,800円(税別)



## ダークレディと呼ばれて—二重らせん発見とロザリンド・フランクリンの真実

「DNAの二重らせん構造」といえば、ワトソンとクリックが有名である。しかし、その発見への決定的なデータとなるDNAX線回折写真を撮影した人物こそ、イギリス系ユダヤ人の名家に生まれた物理化学者ロザリンド・フランクリンであった。しかし、ロザリンの撮ったDNA回折写真はロンドン大学キングズカレッジの同僚ウィルキンズの手によりワトソンの目の触れるところとなり、1953年、ワトソン、クリック、ウィルキンズはDNAの二重らせん構造の発見者としてノーベル賞を受賞し、科学史にその名を刻んだ。

その光の影でロザリンドは科学者としての卓抜した才能と激しい気性ゆえに、男性科学者からは疎ましく思われ、「ダークレディ」(悪女)と呼ばれた。そして、死後は、「栄光を横取りされた悲劇の女性科学者」としてまつりあげられる。しかし、ロザリンド・フランクリンの真実の姿は、豊かな人間性を持ち、余暇も楽しみつつ、「明瞭で完璧な」研究をめざす科学者であった。男性中心の科学領域において女性であるがゆえに、またユダヤ人であるがゆえに被るさまざまな困難に立ち向かいながらも、

強い意志をもって生命の謎を探求するロザリンドの態度は、今なお立ちふさがる多くのハードルを乗り越えなければならない現代の女性科学者たちをきっと勇気づけるであろう。

本書が貴く詳細な資料に基づく実証性と冷静で暖かい著者の視点は、「女性と科学」への偏見の修正と同時に、「科学」「発見」「業績」の概念の再検討を迫る。

### X線結晶学

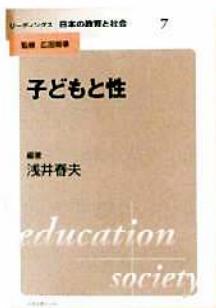
X線の回折パターンをもとに、結晶の構造を明らかにする学問領域。DNAやタンパク質などの高分子の正確な構造解析は、計算機を用いる現代においても、なお難しい。ロザリンドは学生時代に石炭の多孔質性の研究を行った延長で、石炭(や粘土)のX線構造解析を学んだ。そして、X線結晶学を使って物理化学を生物学の域まで拡張しようという当時の学問の流れの中で、DNAの構造解析に携わった。

くりみわ  
久利 美和(東北大学特定領域研究推進支援センター助手)

## 新刊・新着本紹介



平成19年版  
**男女共同参画白書**  
■ 内閣府男女共同参画局 編  
■ 全国官報販売協同組合  
■ 2007年  
■ 2,572円(税別)



日本教育と社会  
**子どもの性**  
■ 浅井 春夫 編著  
■ 広田 照幸 監修  
■ 日本国書センター  
■ 2007年 初版  
■ 3,500円(税別)



グローバル化時代の  
外国人・少数者の人権  
日本をどうひらくか  
■ 西川 潤 編著  
■ 明石書店  
■ 2005年 初版  
■ 3,800円(税別)



**Feminist Science Studies**  
■ Maralee Mayberry, Banu Subramaniam, Lisa H. Weasel 編  
■ Routledge  
■ 2001年 初版  
■ 2,800円(税別)



ドメスティック・  
バイオレンスとジェンダー  
適正手続きと被害者保護  
■ 吉川 真美子 著  
■ 世織書房  
■ 2007年 初版  
■ 2,800円(税別)



## ジェンダー・エッセー

## 「クイア理論」から「クイア・ヒストリー」へ

九州大学大学院法学院教授 熊野 直樹 (くまの なおき)

性愛(セクシュアリティ)の研究に関しては社会学や歴史学が、他の学問分野と比較してかなりの活況を呈しており、相当な蓄積を誇っている。それに対して、政治学の分野では、性愛への関心は従来から低く、2003年の日本政治学会の年報において遅ればせながら「性」と政治という特集が組まれた程度である。しかし、管見の限りではあるが、この特集に対する政治学界からの反応は鈍く、依然として政治学者の関心は低いままである。

そもそも政治学においてはジェンダーそのものに対する関心もさほど高いわけではない。性愛に対する関心が低いのも首肯できる。性愛と政治という組み合わせ自体、マスコミではスキャンダルとして注目されても、政治学ではいわばタブー視されており、そのためには性愛と政治を結びつける理論も分析視角も存在していないと言つても過言ではない。

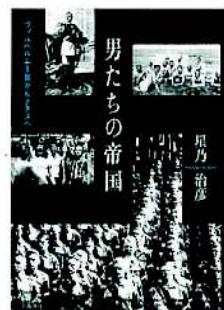
こうしたなかで、性愛と政治との関係を考える際に有効で、興味深い議論がドイツ現代史研究から提起された。星乃治彦著『男たちの帝国—ヴィルヘルム2世からナチスへ』(岩波書店、2006年)がそれである。この研究は「クイア(Queer)理論」を歴史学に応用したものだ。「クイア理論」は星乃氏によると、考察の対象をゲイだけでなく、「変態」視された性規範の様々な「逸脱」行為にまで拡大し、〈男性-女性〉、〈ヘテロ-ホモ〉といった「境界」自体を溶解し、性愛を相対的なものとして捉えている点に特徴があるとされる。さらに「クイア理論」は、「ヘテロ」の中に潜伏しているホモセクシュアリティといった問題設定を可能とし、同性愛者がアブリオリに存在するという本質主義ではなく、「作られるもの」であるという、いわゆる社会構築主義の立場もその特徴とされる。

このような特徴を持つ「クイア理論」を歴史分析にあてはめ、自然状態の中では本来「どうでも良いこと」だったはずの差異がなぜ問題とされるようになり、差別を生み出してきたのか、という問題を、時

系列の流れの中で考察するものとして「クイア・ヒストリー」が提唱される。すなわち、本来は差異が存在しなかったところに壁が設けられ、「同性愛者」が差別の対象とされていくプロセスを解明することが「クイア・ヒストリー」の課題のひとつとされる。ドイツの歴史をケース・スタディーとしてその可能性が模索されている。

本書では、「同性愛」概念が近代において成立し、やがて壁が設けられ、差別の対象となっていくプロセスが実証的に明らかにされる。とりわけ性愛と政治という観点から見て興味深いのは、ドイツ第二帝政の皇帝ヴィルヘルム2世とその「愛人」であったオレンブルク伯との関係である。ヴィルヘルム2世との「同性愛」的関係を通じて構築された両者の私的関係がやがて公的な関係へと変質し、公私が混同されていく過程が明らかにされる。当時の宫廷政治なるものの実態は「同性愛」を通じた「私的」空間の「公的」空間への拡大であり、それが「同性愛」を問題視し、差別化するブルジョア的・市民的な近代社会によってスキャンダル化され、やがて帝政自体が破壊されていくことになる。その象徴的な事件が1907年のオレンブルク事件であった。その後極限までに、本来「どうでも良いこと」だったはずの「同性愛」を問題視し、差別化したのが、まさにナチズムであった。

「クイア・ヒストリー」は、本来は「どうでも良いこと」だったはずの私的な性愛が近代社会の登場以降問題視され、差別化される過程を明らかにするとともに、私的な性愛が何故に政治において問題視され、場合によっては政治的責任すらとらねばならなくなってしまったのかという性愛と政治との関係について考察する際に、星乃治彦著『男たちの帝国』(岩波書店、2006年初版)有益な分析視角を与えてくれる。

北九州市立  
男女共同参画センター

ムーブ

Tel: 093-583-3939 Fax: 093-583-5107  
ホームページ [http://www.kix.or.jp/move\\_we](http://www.kix.or.jp/move_we)  
E-Mail move@move-kitakyu.jp

Cutting-Edge 第28号

【発行】 北九州市立男女共同参画センター“ムーブ”

【発行日】 2007年9月20日

※本誌は再生紙を利用しています。